

「縁・えにし」のよろこび

2019 年のご法座を一挙にご紹介！

～春季・彼岸会～（3月18日）

今回から始まった春の彼岸の仏縁、住職が法話（仏さまの話）を勤めました。「自坊でのご法話、緊張とともにご門徒の皆様のあたたかい眼差しが有り難かったです。」と、お育てに感謝感謝でありました。



～春の仏教婦人会法座～（3月26日）

元芸能人（元ジョビ・ジョバ）の木下先生、臨場感たっぷり「笑いあり・涙あり・慶びあり」のご法座となりました。



～永代経法要～（4月23日～25日）

宮崎からご出講の福永先生は、布教への情熱をお持ちの先生です。お念仏を称えることの尊さをお取り次ぎいただきました。なお、住職を布教使の道に勧められた先生です。



～秋季・彼岸会～（9月20日）

轟先生は、とても勉強熱心な先生です。住職と尊敬している布教使（福間義朝先生）が一緒です。なお、尊敬している福間先生は、2021年の報恩講にご出講されます。



～秋の仏教婦人会法座～（10月30日）

婦人会法座には、那珂川市内のお寺（8ヶ寺）の婦人会役員さんがお参りに来られます。婦人会には、参り合いという習慣があります。この習慣は、那珂川の地にお念仏が薫ることにつながることで、ご講師の平川先生は、住職と長年の友人であります。（歳も一緒です…49歳！）



～親鸞聖人・報恩講法要（758回忌）～ （11月26～28日）

浄土真宗のお寺は、報恩講法要を大切にしています。雅楽の奏樂の中、「宗祖讃仰作法」という特別なお勤めをいたしました。感動の仏徳讃嘆でした！講師の内田先生には、三重県四日市市からお越しいただきました。いままでのご講師で、一番遠方になります。阿弥陀さまのお慈悲をよろこぶ、感動のご法話でした。



阿弥陀さまからのお手紙

『お慈悲のお布団』

内田正祥（三重県四日市市 正覚寺）

二十五年前、あるおばあちゃんに出会いまして。住職となつて間もない頃、私がドキドキしながらご法事の後のご法話をさせていたかどうかとすると、「あく！お説教、お説教！なんまんだぶ、なんまんだぶ」と、まだ何も話してないうちから申され、緊張している私はますます戸惑つてしまいました。しかし、お出合いを重ねていくうちに、だんだんと、そのおばあちゃんのことのが有り難くなつてきました。時折「阿弥陀さんのお慈悲はあつたかいなあ」と、独り言のようにおっしゃいます。「阿弥陀さまのことが大好き！」といった感じのおばあちゃんでした。

その方は、ご門徒の親戚の方でしたので、ご法事のおきから二十年ほどが経ち、二年ぶりにお会いできることを楽しみにうかがつたご法事に、おばあちゃんの姿がありません。お参りの方にお尋ねすると、一人の男性が「母のことですね、今日は私が代りにお参りさせてもらいました」と言われました。「おばあさんは、お元気ですか？」とお聞きすると、「母は昨年冬、ご往生させていただきました。私は、寂しさが込み上げてきました。」

うなだれている私に、その方が「ご院さんは、母の口癖を知っていますか？」と尋ねられました。「はい、知っていますよ。『阿弥陀さんのお慈

悲はあつたかいなあ！』でしょ」と言うと、「そうですね。母は最後に母の口癖の意味を、私たちに子どもに教えて往つてくれました。聞いてくださいますか？」と言われます。私は「ぜひとも聞かせてください」とお願いしました。

「母が床に伏すようになったのは、昨年の夏の終わり頃でした。お医者さんからは、『なにぶん九十六歳という高齢ですから、回復することは難しいです』と言われました。冬になった頃、呼びかけても返事はなく、微かな寝息をたてているだけになっていたので、母の枕元に子ども達全員が集まっていた。ちょうど先生が往診に来てくださり、診察を終えて帰られるときに、私たちだけ聞こえるような小さな声で、『あと、二、三日というところでしょうか』と言われました。一番下の弟が、先生を玄関まで送つていって、何やら話していました。戻つてきて、私に言うんです。

『先生に、おふくろを抱っこしてもいいかって聞いたから、そつとならいいって言うてくれたから、抱っこさせてもらおうわな！』。そう言つて、母をそつと抱き上げて『軽うなつてしようたな！苦労かけたな！俺が一番長いこと甘えとつたなあ。ごめんな。ありがとうな！』と言いなながら、布団に戻しました。それを見ていた他の兄弟たちも代わる代わる母を抱っこしては、お礼を言いました。私も同じことがしたくなつて、母を抱き上げようとしたのですが、私だけ腕や足腰に力がなくて…できませんでした。

何かしたいと考えているうちに…、添い寝ならできると思いついて、布団に入って母の背中をさすっていました。いつの間にか私は眠つてしまつ

たようで、しばらくして、すすり泣く声が聞こえて目が覚めました。兄弟たちの声でした。なぜ泣いているのだらう隣を見ると…、母は隣に寝ている私に気づいたのでしよう。寒い日でした。私に風邪を引かせてはならないと思つて、骨と皮だけになったシワだらの手で、自分の布団を私に掛けようとしていました。最後の力を振り絞るように、母は私に布団を掛けよう掛けようとして、何度も何度も指先から布団が落ちてしまいます。それでも止めることなく、母は自分の背中が布団からでてしまうまで、私に布団が全部掛かるまで掛け続けました。

兄弟たちのすすり泣く声の意味が私にもわかりました。母は抱っこしてもらいたかつたのではありませんでした。母はお礼を言つてほしかつたのではありませんでした。母は最後まで、私たちが子どものことが心配で心配でならなかつたのでした…。何十年振りかで、私は母の胸に顔を埋めて泣きました。母は、最後まで母を止めませんでした。母は最後まで、母であり続けました…。母の口癖だった『阿弥陀さんのお慈悲はあつたかいなあ』という慶びの心は、こういうことなんだと、母の最後の姿を通して知らせていただきました。それから三日後、母は静かにご往生させていただきますました。

お慈悲の温かさ…、それは、無条件にそそがれている阿弥陀さまのおはたらきであり、私のことを思うて止まない願いの温かさだったのですね！ありがとうございました。おばあちゃん！（この法話を書かれた内田先生は、昨年の「報恩講法要」のご講師でした。）

